

社会的市場経済と エコロジカル・トランスフォーメーション

ドイツでは選挙の結果、新たな政府が発足しようとしている。今のところ新政府は、ドイツ社会民主党(SPD)、同盟90・緑の党、自由民主党(FDP)の3党による連立政権になる公算が大きい。この連立政権は、各党のシンボルカラー(赤、緑、黄)にちなんで「信

号機(アンベル)」と呼ばれている。ドイツでの選挙は、欧州全体に広がる変化の趨勢と密接に関連しており、注目に値する。今、世界は、大規模でダイナミックな衛生上の危機を経験しており、その結果、総じて我々は危機の時代に生きていることを誰もが意識するようになった。

哲学者・ボン大学教授

マルクス・ガブリエル



即ち、多くの危機が入れ子状に組み込まれたシステムと向き合っているのだ。それを認識しながら社会生活を送っているのである。換言すれば、現下のパンデミックは、人類が自分達の自然な生活領域(いわゆる環境)を過剰に開発し

てきたことと表裏一体の関係にある。過剰な開発は、気候変動を加速し、さらにはリベラル・デモクラシーの危機にもつながっている(例えば、ボルソナロ・ブラジル大統領がアマゾンの殆どの熱帯雨林を支配する政治的権力を握っていることを考えてみればよい)。リベラル・デモクラシーの危機は、いわば第1次冷戦の終結に伴う必然的な結果である。その後、世界は、地政学的に多極化した時代を新たに迎えた。仮に、これほど多極化した状況になっていなければ、パンデミックそのものも、国際協調によってそれに対抗する努力の仕方も、双方、共に現在とは違ったものになっていたかもしれない。

(注1) Markus Gabriel, *Moralischer Fortschritt in dunklen Zeiten*, Berlin, 2020
英訳は *Moral Progress in Dark Times*, Cambridge, 2021

写真に撮られたのである。これは、その後の選挙戦で彼にとって致命傷になったとされている。この一件において、①気候変動の危機、②公衆の面前でタイムング悪く判断を誤って冗談を言ったこと、③現代の通信技術とメディアの特性、という3つの要素が絡み合っ、欧州での実に重要な選挙の結果に影響を与えていることになった。

こうした筋書きは、今後も起こり得るし、他の欧州の国にも波及し得る。なぜなら、どの国も同様の問題に直面しており、人間性、地球環境、デジタル技術、フェイク・ニュースなどが相互に作用しているからだ。

速い速度での新自由主義的な資本主義によるラットレース(激しい競争)が、人間であることの基本的な構造と単純に両立できないことは、遅くとも2019年頃から誰の目にも明らかになった。その理由は極めて単純なことだが、見過ごされやすい。人間は、より高い道徳や倫理を持ち得るような動物なのだ。つまり、自分自身を把握するという観点から自分の生を送ることができる動物である。人間はサビエンス(知恵がある)とされるゆえんである。我々は自分自身について、ある仕方と考えるからこそ、すべきことを行うのだ。こうして、人間社会は、多様なそれぞれの自画像を中心にして回っているのである。

私は2020年にドイツで拙著『暗い時代の道徳的前進』^(注1)を出版した。その中で私は、

「この複雑に絡み合った入れ子状の危機を解決する唯一の方法は、道徳的に良い行為の道を見極めることだ」と論じた。この本を書いた理由は、ドイツで「社会的市場経済」と呼ばれるものを哲学的に擁護しなかったからである。ところで、社会的市場経済は、広い意味において明らかに、エコロジカルな思想と両立するものでなければならぬ。つまり、人間の活動に対する全体的で包括的な理解が必要なのである。とりわけ、それが前提としているのは、我々が人間とその倫理への関係についての極めて重要な事実を認識しているということである。つまり、我々が普遍的に順守すべき道徳的な事実があるということである。それらの道徳的事実は、我々が共有する人間性のおかげで相互にいかなる義務を負っているのかを告げる定言命法として見る事ができる。

したがって、具体的には、倫理的価値に対する洞察を、経済的・エコロジカルな政策立案に結び合わせる必要がある。これはまさにSDGsのアイデアに体现された考え方である。これは、将来の市場のあり方を議論する際に、人文学や定性的な社会科学を取り入れる必要があるということでもある。そうなること、将来の市場は、強い倫理的な関与によって制約されなければならない。

この文脈からすると、倫理と哲学は、21世紀における持続可能な価値体系のために基盤を提供する機能を担うことになる。そして、

持続可能な価値体系において、経済成長の概念は変わるようになる。GDPのような純粋に定量的な尺度が、原理的に無制限である質的な変化の考え方に置き換わる。質的な変化には、クオリティ・オブ・ライフ(QOL)の考え方が組み込まれる。それは、純粋に経済的なグローバル化に特徴的である行き過ぎた開発とは相容れない。

こうした理由で、欧州(ひいては世界)においていわれる資本主義は、徐々に変容している。それは、価値に駆動され、倫理に基づいた社会的市場経済に立脚することで、持続可能な形式のエコロジカル・トランスフォーメーションに向けた一連の条件になっているのだ。社会的市場経済は、(しばしば新自由主義的資本主義と関連付けられる)極端に自由な市場と社会主義とが対立する現代の苦境を乗り越えていくものである。このように私は信じている。^(注2)

(2021年11月寄稿)

Profile

マルクス・ガブリエル

1980年生まれ。2005年に後期シェリングをテーマにした論文でハイデルベルク大学から博士号取得。2009年に権威あるボン大学哲学正教授に史上最年少で抜擢。「新実在論」を打ち立て、世界的に注目を浴び、『なぜ世界は存在しないのか』(講談社選書メチエ、2018年)が哲学書としては異例のベストセラーに。

(注2) The New Instituteの活動も参照: <https://thenewinstitute/en>
本研究はThe New Instituteから2021~2022年に受けた助成による